経済大国・大学・アカデミズム

随　筆

角　谷　典　彦*

ここ数年来，理工系学部の卒業生が，銀行・保険・証券会社といった金融界に就職するのが目立ってきた。筆者が所属する大阪大学基礎工学部機械工学科もその例外ではない（ちなみに，昭和60年頃はたかだか就職者の数パーセント程度であったのが，年々増加し，昨年（平成元年）度には20パーセントを超えた）。はじめのうちは，「まあいろんな分野で活躍する卒業生がでてくるのは結構なことだ」と笑っていたが，今やその笑いも凍りつきそうになってきた。某銀行では，卒業予定の学生にひそかに電話し，「当行で10年間がんばってくれたら，父上や大学の教授先生よりよい待遇をしますよ」とホザクそうである（つい筆がすべって下品な表現になってしまった。お許し下さい）。一方で，ハッと気がつけば，大学院の博士課程に進学する学生が最近激減している。つい10年余り前まで，いわゆるオーバードクター問題で悩んでいたのがウソのようである。よそ目には，日没することのない大帝国に見えたイギリスのビクトリア朝末期に，一流大学出がこぞって当時の金融界のメッカ，シティになだれこむ現象が生じたそうである。今にして思えば，これがイギリス産業界空洞化の始まりだったという。

一時期，全国の俊秀が医学系統の分野に殺到し，将来のわが国の各界における知的バランスに危惧の念を抱き，当時現役の医学部教授で後に大阪大学総長を務められた山村雄一先生にご感想を伺ったことがある。先生は「医者になるには必ずしも秀才でなくてもよい。病人という弱者の立場が理解できることが第一だ」とおっしゃったように記憶している。この医学志向の熱気は今も残っているが，他の学部が18才人口の激増で入学定員の臨増を余儀なくされている中で，賢明なる医学関係者は既に医学系大学の入学定員を凍結乃至縮少させ始めている。ところが，某医学部の先生のお話では，「医学部に秀才が集まるといわれるが，基礎医学系では他学部出身の“医師でない”医学部スタッフが増えていますよ」とのことであった。すると，医学部に受験生が殺到するのは，学問としての医学が若者を惹きつけているのではなく，現在のわが国における医師の社会的地位（はっきり言ってしまえば経済的特権）に惹かれるのではないかという邪推を生む。戦前の西田哲学にあこがれて集った京都学派の若者や，戦後の湯川・朝永両博士のノーベル賞に触発された物理ブームとは一寸違うような気がする。皮肉なことに，前者は銀閣寺疎水べりの小径にその名を残すのみとなり，一時は栄華を誇り，他分野の一部から“物理帝国主義”とひんしゅくを買った物理学界にも昔日のおもかげはなく，われわれと同じく，その卒業生を金融界にひきぬかれるのに困惑しているのが現状である（最近の学術会議物理学研究連絡委員会での話題より）。

もとより製造業を中心とする産業界も，金で若者を釣ろうとする最近の一部金融界のやり口をだまって見ているわけではない。人事担当者の話によれば，「われわれも金融界に負けない待遇を真剣に考えています」という。一方，あり余った金にものを言わせて，大学の研究室など及びもつかぬ最新の設備（もっとも，彼らが“モノになる”と判断した分野に限るが）とマンパワーを投入して製品開発にしのぎを削っている（わが国の科学・技術の研究・開発費が欧米に比べて少ないという神話は，産業界の開発

*角谷典彦（Tsunehiko KAKUTANI），大阪大学，基礎工学部機械工学科，教授，理学博士，流体力学・非線形波動

費に関する限り，もはや崩壊している)。

さて，とり残されるのが大学である。よく知られているように，最近の校費は事実上凍結されたままであり，科研費の伸びも目をむく程のものではない。しかも，重点領域云々という名目で，ここでもプロジェクト研究が優遇されている。文部省は，寄付講座に象徴されるように，委任経理金の獲得を奨励する。もとより大学で“役に立つ”研究をして悪いわけはないし，良い意味での産学協同は積極的に推進すべきであろう。しかし，一方では“金にならない”，したがって企業が見向きもしない基礎研究もなおざりにしてよいわけがない。元来，学問や芸術は，むしろ金がかかるものであり，それらが必ずしも金になるとは限らないのが普通である。ゴッホだってモジリアニだって自分の作品を極東の某経済大国の企業や地方自治体がウン10億で買いとると思ってその絵を描いたわけではあるまい。彼らの絵が金になったのは結果にすぎない。ヘルツが，その有名な実験によって，マクスウェルが予言した電磁波の存在を検証したのも金もうけのためではなかろう。それどころか，当時のジャーナリストに電磁波が“何の役に立つのか”と聞かれて，「そんなことは考えたこともない。マクスウェルの理論を実証できたことで満足だ」と答えたという逸話さえ残っている。マルコーニが，これを無線通信に応用し，役に立つことを示したのはその結果である（もちろん，これはこれですばらしい業績には違いないが)。

さて，話を本題へもって行くと，今こそ将来の知的エリートを養成し，彼らが誇りをもってそこに留まりたいと願うような本当の大学を構築すべき時だということが言いたかったのである。この国は，９割近い人々が“中流”意識を持っている結構な“平等社会”であり，エリート養成などと言い出せば，たちまち“差別反対”と袋叩きにあいかねない。しかし，現在の100近い国立大学のすべてと，数百にのぼる公・私立大学に“公平に”多額の補助金を分配することなど，いかに経済大国の文部省や大蔵省といえども出来ない相談だろう。少数でもいい，真のアカデミズムに根ざした精鋭を育て，彼らが喜んでその研究を続けたいと願うような機関を今こそ創るべきである。現在の博士課程の奨学金を給付制にしたり，ポスト・ドクの有給研究生制度をつくるのもよいが（これさえまだ実現していない！），そんなケチくさいことでは，最近の拝金主義の激流をくいとめられそうもない。とりわけ，各地の大学に続々と博士課程が誕生しつつあるときに，またゾロこれらをすべて“平等に”などと言っていると，某評論家に駅弁大学とののしられた新制大学の再生産になってしまうのがオチである。どんな基準で選ばれたのかは知らぬが，ゴーマン報告によれば世界の大学ランキング中，わが国からは東京大学がかろうじて唯一つ，60数位にランクされているだけだそうである。重ねて言う。少数でもよいから，金融界に負けない待遇と，産業界の開発費に劣らぬ研究予算をつけて，優秀な若者に「好きなことをやれ。必ずしも金にならなくてもよい」と言えないものだろうか。わが経済大国には，今やこれ位の“ぜいたく”をする余裕があると思うのだがいかがなものだろうか。

高度成長期にさしかかった頃，所得倍増論を唱えた池田勇人首相が，時のフランス大統領ムッシュ・ドゴールにトランジスターラジオのセールスマンと嘲笑されたという。今イギリスの宰相マダム・サッチャーがスコッチウィスキーのセールスに来日する世の中である。アカデミックな大学を創ったヨーロッパを，大衆的（失礼！　民主的）駅弁大学の日本が追い越したという思い上った楽観論も一部にはあるようだが，世界有数の経済大国になった今こそ，基礎的・原理的な分野でも受信ばかりでなく発信できる大学を持ちたいものである。金にならない基礎や原理はヨーロッパにおまかせ，おいしい果実だけは頂き，というのでは虫がよすぎるのではないか。マルコーニ的研究ももちろん結構だが，マクスウェル－ヘルツ的研究をこそ“アカデミックな”大学で産み育てたいものである。現に，マダム・サッチャーは「ニュートンの運動方程式やマクスウェルの電磁方程式を使う企業からはロイヤルティを徴収したい」と言ったとか言わないとか。あながち笑い話だと片付けてしまえない気がする。

村橋教授から本誌に随筆を執筆するようにとのご依頼を受けたのを幸い，現に大学に職を奉じる自分の責任は棚にあげて，勝手な独断と偏見に満ちた感想や希望を述べさせて頂いた。読者諸賢のご批判とご叱正を頂ければ幸である。